

小・中学生のスキー教室に関する研究

— 新潟大学公開講座の事例から —

大橋正春*・山崎 健*・池田誠司**

1. はじめに

平成15年度新潟大学教育人間科学部主催の公開講座として、小中学生スキー教室が実施された。これは、新潟県という雪の特性をいかしたスキー教室を実施し、冬の自然体験活動を通し、スキー技術を高めると共に、冬の自然や雪国の生活への理解と関心を深め、参加者相互の親睦を図り、豊かな人間性を養うことを目的とした。さらに、小中学生としては、最近ではなかなか異年齢間での交流が少ないため、小学4年生から中学1年生までの男女混合班として2泊3日の日程で実施した。このスキー教室は、スキー講習の他にキャンドルファイヤー、星座観察、お楽しみ会などをプログラムとして取り入れた、自然体験活動を含む総合的なプログラムである。このスキー教室を通して小中学生のスキー教室はいかにあるべきかを探り、今後の資料とすることを本研究の目的とした。尚、行動日程及び参加者の持ち物については行動日程表(資料1参照)参加者の持ち物リスト(資料2)を参照していただきたい。

2. 研究方法

質問紙法

自由記述による分析

3. 結果と考察

参加者である新潟市の小中学生のスキー経験を調査したところ、これまでにスキーをしたことがある

者が36名、したことがない者が8名いた(表1参照)。このことに関して、家族にスキーをする人はいるかという質問をしたところ、家族の中にスキーをする人がいる者は36名、いない人が8名いた(表2参照)。雪国である新潟県の環境を考えると、家族の中にスキーをする人がいても何ら不思議ではない。さらに小中学生が自ら何らかの交通手段を使ってスキー場に足を運ぶということは考えにくく、スキーをしたことがある参加者の多くは、スキーをする家族に連れられスキーに行ったことがあるのだと推察される。したがって、小中学生にとって、家族の中にスキーをする人がいるかいないかは、本人のスキー経験と大きく関係している。次に、経験回数については「1～10回」が24名であるのに対し、「11回以上」はしたことがある者の半数の13名しかいなかった(表3参照)。滑走回数が技能レベルと密接に関係するスポーツであるスキーにおいて、経験回数が10回程度というのは少ないと言える。しかし、スキー教室への参加動機(複数回答可)では、「スキーがしたかったから」、「スキーが上手くなりたかったから」という回答が多い(表4参照)。このことから今回の参加者である新潟市の小中学生にとってスキーは、「したことはある」といったレベルであり、十分な経験を積んでいるとは言えないが、スキーに対して積極的な気持ちは持っているということが言える。したがって、今回のスキー教室は新潟市の小中学生のスポーツニーズに答えるものであると共に、スキーを経験し上達する貴重な体験だったと言えるのではないだろうか。

それではスキー教室に対して参加者がどんな感想を持っているか見ていく。今回のスキー教室を通してスキーが好きになったかという質問に対しては44名中43名が好きになったと答えた(表5参照)。このことは「あなたは班のスキー技術に満足しましたか?」という質問に対し、29名(全体の6割)が

2004.11.30 受理

*保健体育・スポーツ科学講座

**新潟大学大学院教育学研究科

資料 1

生活時間	朝食 (7:30~8:30) 昼食 (12:00~13:30) 夕食 (18:00~19:00) 入浴 (16:00~22:00)																		
時間帯	5:00	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00	23:00
初日			集合 受付 (7:45~)	出発 移動	到着 移動	レンタル 用品 貸出	昼食	休憩 準備	班分け スキー講習	チェックイン 休憩	夕食 休憩	星座・ キャンドル	入浴・ 自由時間	消灯					
二日目			起床	朝食 準備	スキー講習	昼食 休憩	スキー講習	休憩 自由時間	夕食・ 入浴・ 休憩	お楽しみ 会	入浴・ 自由時間	消灯							
三日目			起床	朝食	スキー講習	返 校式	昼食・荷物 整理・自由 (お土産等)	出発 移動	到着	解散 式	解散								
時間帯	5:00	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00	23:00
備考	<ul style="list-style-type: none"> ・ 集合, 受付, 出発式, 解散式は「新潟大学五十嵐キャンパス西門」 ・ 送迎車両は西門駐車場へ誘導。(要誘導係) ・ 初日の昼食から3日目の昼食まですべて食堂で食事が出る ・ 必要に応じて活動中に飲み物・おやつを用意する ・ バス移動中「越後川口S.A.」で休憩を取る ・ 班分けは技術別になるので, 現地で行う(日程中, 班の移動もありうる) 																		

資料 2

持ち物リスト

NO	道 具	用 途	数 量	備 考	チェック
1	しおり	全 般	1 部		
2	筆記用具	全 般	1 式		
3	長袖上下 (学校体操着など)	宿 泊	適 宜		
4	着替え	着 替 え	適 宜		
5	洗面用具	生 活	一 式		
6	タオル	生 活	2, 3 枚		
7	バスタオル	入 浴	1 枚		
8	下着	着 替 え	適 宜		
9	靴下	着 替 え	適 宜		
10	スキー用具 (板, スtock, 靴)	ス キ ー	一 式	持参加者のみ	
11	スキーウェア	ス キ ー	1 着	持参加者のみ	
12	セーター, フリース等 (防寒用)	ス キ ー	適 宜		
13	アンダータイツ (防寒用)	ス キ ー	適 宜	あれば	
14	厚手の靴下	ス キ ー	2, 3 組		
15	毛糸の帽子	ス キ ー	1 つ	持参加者のみ	
16	手袋	ス キ ー	1 組	持参加者のみ	
17	ゴーグル又はサングラス	ス キ ー	1 つ	持参加者のみ	
18	日焼け止め	ス キ ー	適 宜	必要な人	
19	ワックス	ス キ ー	適 宜	ある人のみ	
20	懐中電灯	生 活	1 つ		
21	カイロ	全 般	適 宜	必要な人	
22	土産代	土 産	適 宜	必要な人	
23	ティッシュ	生 活	適 宜		
24	常備薬	生 活	適 宜	常用薬あれば	

「満足」, 「やや満足」と答えたことと (表6参照), 「あなたはコーチの指導に満足しましたか?」という質問に対し, 41名 (全体の9割) が「満足」, 「やや満足」と答えたこと (表7参照) から, 「スキーがしたい, 上手になりたい」という参加者に多かった参加動機にふさわしい班編成, スキー指導が行われたと言える。そしてそれによって参加者がスキーの特性に触れ, スキーに対する好意的態度を育んだと言える。

キャンドルファイヤー, 星座観察は初日の夜に行った。気温が非常に低く長時間外で立ち止まっていることはできないので, プログラムとしてはゲームをしたり歌を歌ったりするキャンプファイヤーとは異なり短時間である。小さなまくらを作りその中に火を灯し, ライトアップした入場通路の先に高さ2メートル程のキャンドルファイヤーを作り (写真3

参照), それを囲んで火を見つめながら参加者代表に感想を行ってもらい, 記念撮影を行うというもので30分程の内容だった。星座観察はキャンドルファイヤーの後に行い, オリオン座, おおいぬ座, こいぬ座からなる冬の大三角形を中心に行った。それぞれについて楽しかったかどうかという質問をしたところ, キャンドルファイヤーでは「楽しかった」, 「やや楽しかった」と答えた者が30人 (全体の7割) おり (表8参照), 星座観察では21人 (全体の5割) いた。また星座観察では20名 (全体の4割) の者が「普通」, 「ややつまらなかった」, 「つまらなかった」と答えている (表9参照)。キャンドルファイヤーでは記念写真を楽しそうに行う参加者の姿や, 物珍しそうにキャンドルファイヤーに触れる参加者の姿が多く見られた。星座観察については, キャンドルファイヤーの後ということで少し寒さを感じ始めて

アンケート集計結果

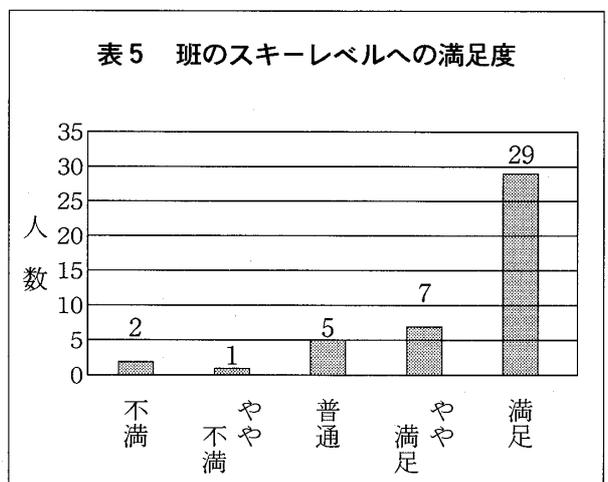
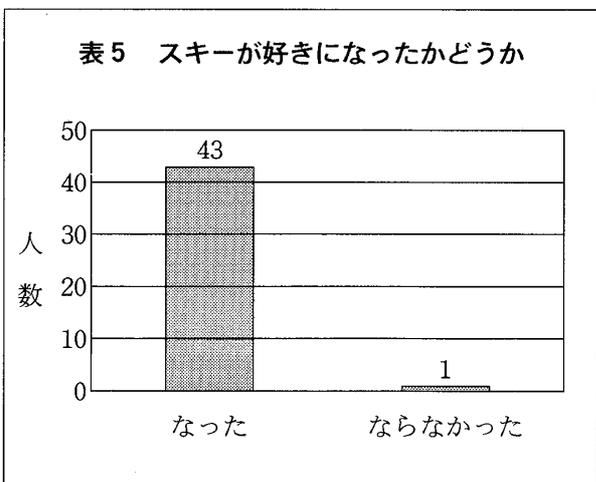
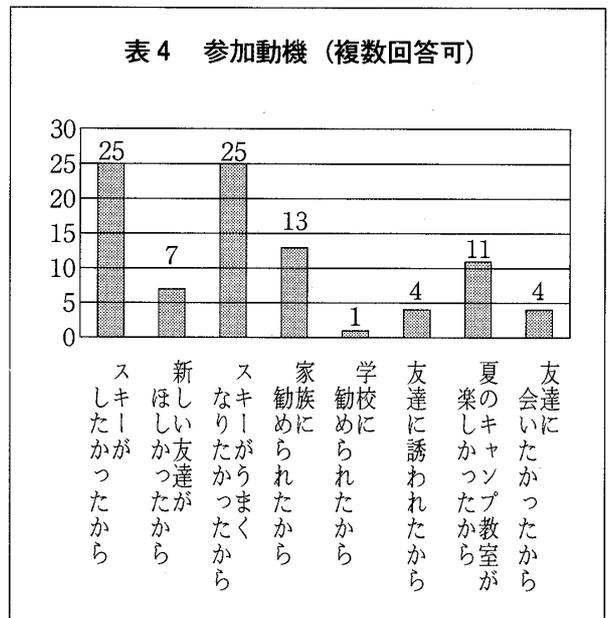
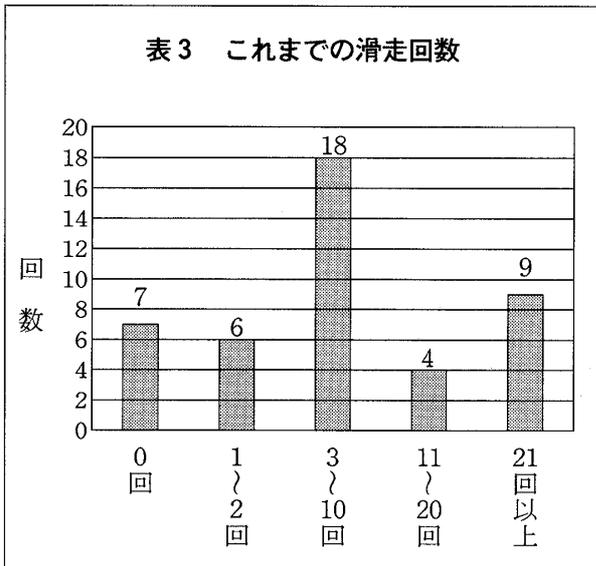
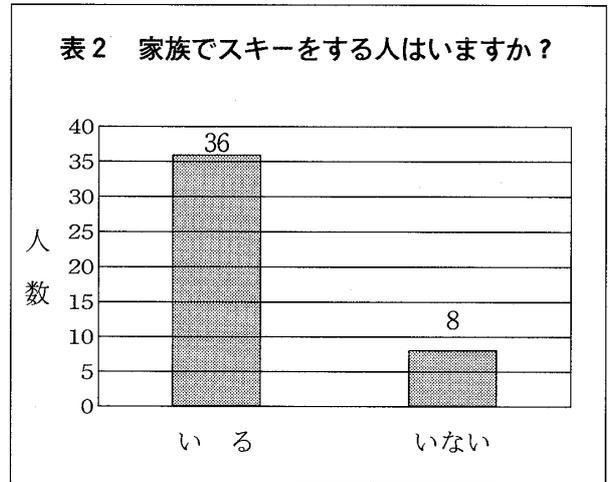
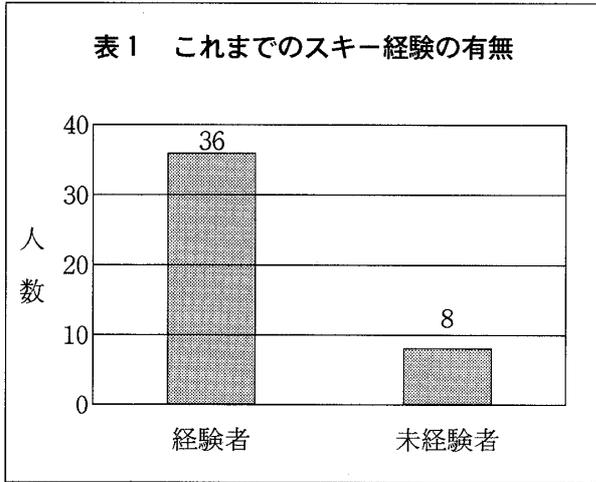


表7 コーチの指導への満足度

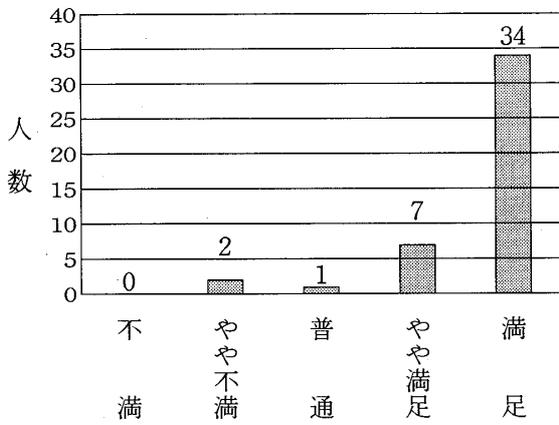


表8 キャンドルファイヤーは楽しかったですか?

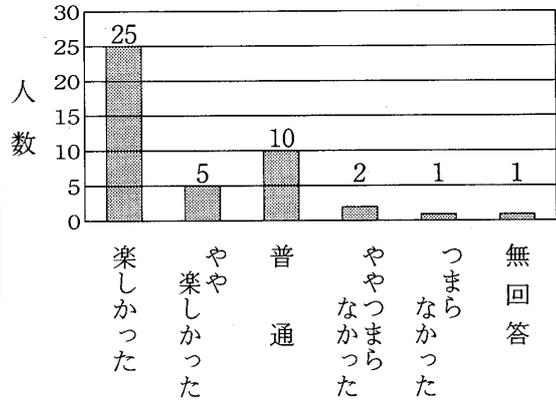


表9 星座観察は楽しかったですか?

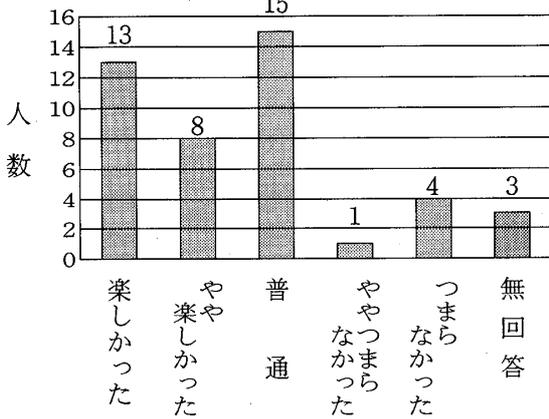


表10 人間関係は上手くいきましたか?

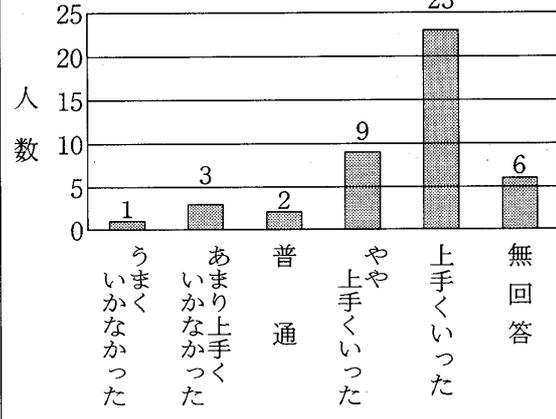


表11 また来年もスキー教室に参加したいと思いますか?

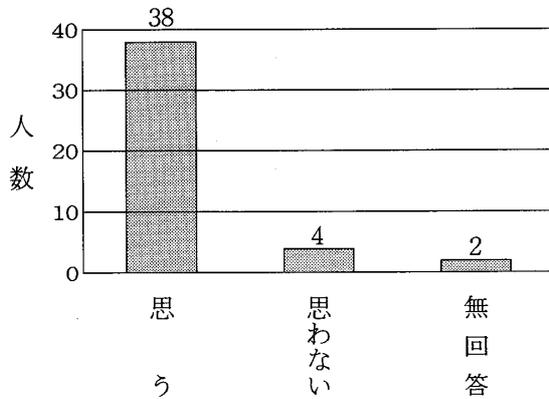
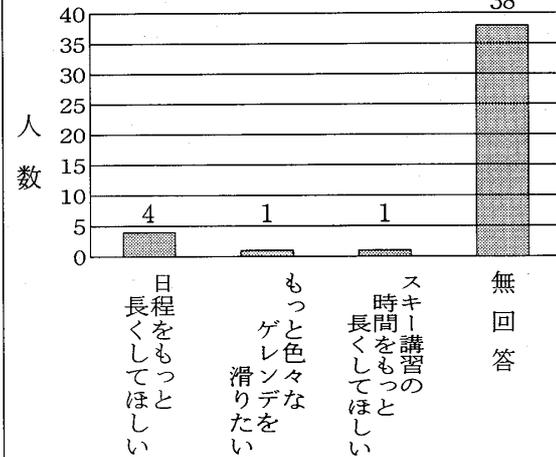


表12 スキー教室に対する希望



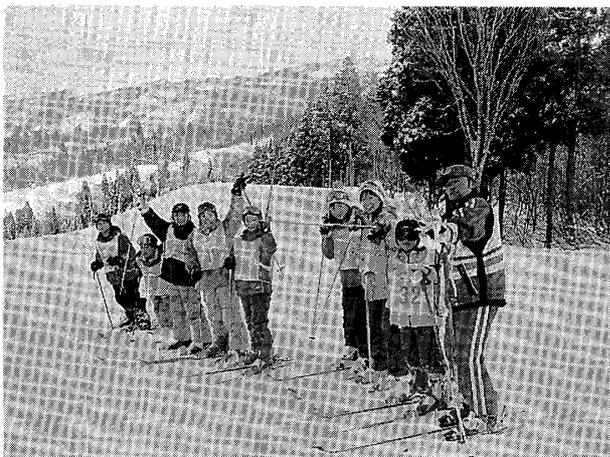


写真1 スキー上級班



写真4 おたのしみ会

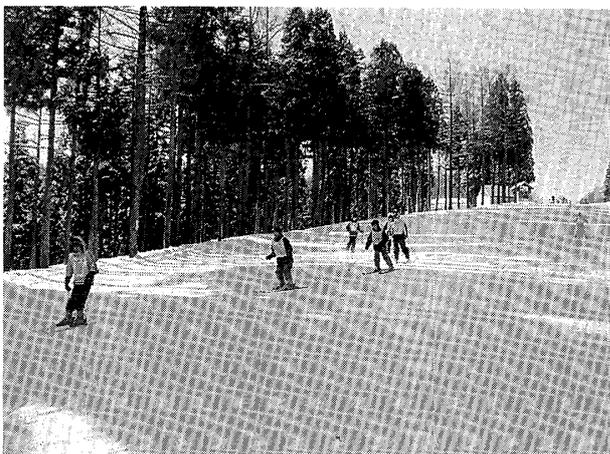


写真2 集団滑走



写真5 グリーンピア津南前での閉講式



写真3 キャンドルファイヤー

おり、さらにその日は空に雲がかかり、冬の大三角形もはっきり見えないような状況だったため、他のプログラムと比べ肯定的な感想を持った者が少なかったと推察できる。

さて、異年齢間の交流に関して「人間関係は上手くいきましたか?」という質問に対しては、「上手くいった」、「やや上手くいった」と答えた者が32人(全体の7割)を占め(表10参照)、参加者にとって普段の学校生活とは違った経験になり、またその関係も円滑であったことが伺える。主観的に見ても、キャンプ体験と比べスタッフが戸惑う状況も少なく、活動班においては各班の上級生が下級生を各部屋で上手くまとめ、お楽しみ会のスタンプを考えたり、面倒を見たりする姿が随所に見られた。

最後に来年も参加したいかという質問をしたところ、38名(全体の9割)が「また来たい」と答えて

おり（表11）、今回のスキー教室に対して肯定的な感想を持った子どもが非常に多かったことが伺える。スキー教室に対する要望（自由記述）においては、無回答が多かったものの、「日程を長くしてほしい」、「色々なゲレンデを滑りたい」、「講習の時間を長くしてほしい」（表12参照）など、よりスキーをする時間を長くしてほしいという回答が見られた。日程を見てみると、初日の午後に2時間、2日目の午前3時間、午後に3時間、最終日の午前2時間半のスキー講習時間を設けているが、今後検討していく必要もあるだろう。

4. まとめ

- 1) 今回のスキー教室は参加者の参加動機に即した指導、班編成により、参加者のスキーに対する好意的態度を育んだ。
- 2) 今回のスキー教室では普段の学校では経験できない異年齢間の交流を円滑に経験させることができた。
- 3) 新潟市の小中学生はスキーに対する好意的な気持ちは持っているが経験が少ないという現状があるので、学校体育への積極的導入を検討する必要がある。
- 3) スキーだけでなくキャンドルファイヤーなどを含む本スキー教室は、参加者に自然体験活動を体験させることができ、参加者から肯定的な感想を得た。

参考文献

- 1) 大橋正春, 長井健二, 高橋健一, 井上一生 生涯学習につながるスキー教室カリキュラムの検討～新潟大学公開講座小中学生スキー教室を例に～日本スキー学会誌 第13巻1号 2003
- 2) 大橋正春, 長井健二, 井上一生, 高橋健一 野外教育に期待される効果について—新潟大学公開講座の事例から—新潟大学教育人間科学部研究紀要第5巻第2号 2003